牛をつないだ椿の木

新美南吉

一

山の中の道のかたわらに、椿の若木がありました。牛曳きの利助さんは、それに牛をつなぎました。

人力曳きの海蔵さんも、椿の根本へ人力車をおきました。人力車は牛ではないから、つないでおかなくってもよかったのです。

そこで、利助さんと海蔵さんは、水をのみに山の中にはいってゆきました。道から一町ばかり山にわけいったところに、清くてつめたい清水がいつも湧いていたのであります。

　二人（ふたり）はかわりばんこに、泉（いずみ）のふちの、しだやぜんまいの上（うえ）に両手（りょうて）をつき、腹（はら）ばいになり、つめたい水（みず）の匂（にお）いをかぎながら、鹿（しか）のように水（みず）をのみました。はらの中（なか）が、ごぼごぼいうほどのみました。

　山（やま）の中（なか）では、もう春蟬（はるぜみ）が鳴（な）いていました。

「ああ、あれがもう鳴（な）き出（だ）したな。あれをきくと暑（あつ）くなるて。」

と、海蔵（かいぞう）さんが、まんじゅう笠（がさ）をかむりながらいいました。

「これからまたこの清水（しみず）を、ゆききのたンびに飲（の）ませてもらうことだて。」

と、利助さんは、水をのんで汗が出たので、手拭いでふきふきいいました。

「もうちと、道に近いとええがのオ。」

と海蔵さんがいいました。

「まったくだて。」

と、利助さんが答えました。ここの水をのんだあとでは、誰でもそんなことを挨拶のようにいいあうのがつねでした。

二人が椿のところへもどって来ると、そこに自転車をとめて、一人の男の人が立っていました。その頃は自転車が日本にはいって来たばかりのじぶん

で、自転車を持っている人は、田舎では旦那衆にきまっていました。

「誰だろう。」

と、利助さんが、おどおどしていいました。

「区長さんかも知れん。」

と、海蔵さんがいいました。そばに来てみると、それはこの附近の土地を持っている、町の年とった地主であることがわかりました。そして、も一つわかったことは、地主がかんかんに怒っていることでした。

「やいやい、この牛は誰の牛だ。」

と、地主は二人をみると、どなりつけました。その牛

は利助さんの牛でありました。

「わしの牛だがのイ。」

「てめえの牛？　これを見よ。椿の葉をみんな喰ってすっかり坊主にしてしまったに。」

二人が、牛をつないだ椿の木を見ると、それは自転車をもった地主がいったとおりでありました。若い椿の、柔らかい葉はすっかりむしりとられて、みすぼらしい杖のようなものが立っていただけでした。

利助さんは、とんだことになったと思って、顔をまっかにしながら、あわてて木から綱をときました。そして申しわけに、牛の首ったまを、手綱でぴしりと打ち

ました。

しかし、そんなことぐらいでは、地主はゆるしてくれませんでした。地主は大人の利助さんを、まるで子供を叱るように、さんざん叱りとばしました。そして自転車のサドルをパンパン叩きながら、こういいました。

「さあ、何でもかんでも、もとのように葉をつけてしめせ。」

これは無理なことでありました。そこで人力曳きの海蔵さんも、まんじゅう笠をぬいで、利助さんのためにあやまってやりました。

「まあまあ、こんどだけはかにしてやっとくんやす。利助さも、まさか牛が椿を喰ってしまうとは知らずにつないだことだで。」

そこでようやく地主は、はらのむしがおさまりました。けれど、あまりどなりちらしたので、体がふるえるとみえて、二、三べん自転車に乗りそこね、それからうまくのって、行ってしまいました。

利助さんと海蔵さんは、村の方へ歩きだしました。けれどもう話をしませんでした。大人が大人に叱りとばされるというのは、情けないことだろうと、人力曳きの海蔵さんは、利助さんの気持ちをくんでや

りました。

「もうちっと、あの清水が道に近いとええだがのオ。」

と、とうとう海蔵さんが言いました。

「まったくだて。」

と、利助さんが答えました。

二

海蔵さんが人力曳きのたまり場へ来ると、井戸掘りの新五郎さんがいました。人力曳きのたまり場といっても、村の街道にそった駄菓子屋のことでありました。

そこで井戸掘りの新五郎さんは、油菓子をかじりながら、つまらぬ話を大きな声でしていました。井戸の底から、外にいる人にむかって話をするために、井戸新さんの声が大きくなってしまったのであります。

「井戸ってもなア、いったいいくらくらいで掘れるもんかイ、井戸新さ。」

と、海蔵さんは、じぶんも駄菓子箱から油菓子を一本つまみだしながらききました。

　井戸新さんは、人足がいくらいくらいくら、井戸囲いの土管がいくらいくら、土管のつぎめを埋めるセメントがいくらと、こまかく説明して、

「先ず、ふつうの井戸なら、三十円もあればできるな。」

と、いいました。

「ほオ、三十円な。」

と、海蔵さんは、眼をまるくしました。それからしばらく、油菓子をぼりぼりかじっていましたが、

「しんたのむねを下りたところに掘ったら、水が出るだろうかなア。」

と、ききました。それは、利助さんが牛をつないだ椿の木のあたりのことでありました。

「うん、あそこなら、出ようて、前の山で清水が湧くくらいだから、あの下なら水は出ようが、あんなとこ

ろへ井戸を掘って何にするや。」

と、井戸新さんがききました。

「うん、ちっとわけがあるだて。」

と、答えたきり、海蔵さんはそのわけをいいませんでした。

海蔵さんは、からの人力車をひきながら家に帰ってゆくとき、

「三十円な。……三十円か。」

と、何度もつぶやいたのでありました。

海蔵さんは藪をうしろにした小さい藁屋に、年とったお母さんと二人きりで住んでいました。二人は

百姓仕事をし、暇なときには海蔵さんが、人力車を曳きに出ていたのであります。

夕飯のときに二人は、その日にあったことを話しあうのが、たのしみでありました。年とったお母さんは

隣の鶏が今日はじめて卵をうんだが、それはおかしいくらい小さかったこと、背戸の柊の木に蜂が巣をかけるつもりか、昨日も今日も様子を見に来たが、あんなところに蜂の巣をかけられては、味噌部屋へ味噌をとりにゆくときにあぶなくてしようがないということを話しました。

海蔵さんは、水をのみにいっている間に利助さん

の牛が椿の葉を喰ってしまったことを話して、
「あそこの道ばたに井戸があったら、いいだろにのオ。」と、いいました。
「そりゃ、道ばたにあったら、みんながたすかる。」
と、いって、お母さんは、あの道の暑い日盛りに通る人々をかぞえあげました。大野の町から車をひいて来る油売り、半田の町から大野の町へ通る飛脚屋、村から半田の町へでかけてゆく羅宇屋の富さん、そのほか沢山の荷馬車曳き、牛車曳き、人力曳き、遍路さん、乞食、学校生徒などをかぞえあげました。これらの人ののどがちょうどしんたのむねあたりで乾かぬわけに

はいきません。

「だで、道のわきに井戸があったら、どんなにかみんながたすかる。」

と、お母さんは話をむすびました。

三十円くらいで、その井戸が掘れるということを、海蔵さんが話しました。

「うちのような貧乏人にゃ、三十円といや大した金で眼がまうが、利助さんとこのような成金にとっちゃ、三十円ばかりは何でもあるまい。」

と、お母さんはいいました。海蔵さんは、せんだって利助さんが、山林でたいそうなお金を儲けたそうなと

きいたことをおもいだしました。

ひと風呂(ふろ)あびてから、海蔵(かいぞう)さんは牛車曳(ぎゅうしゃひ)きの利助(りすけ)さんの家(いえ)へ出(で)かけました。

うしろ山(やま)で、ほオほオと梟(ふくろう)が鳴(な)いていて、崖(がけ)の上(うえ)の仁左エ門(にざえもん)さんの家(いえ)では、念仏講(ねんぶつこう)があるのか、障子(しょうじ)にあかりがさし、木魚(もくぎょ)の音(おと)が、崖(がけ)の下(した)のみちまでこぼれていました。もう夜(よる)でありました。行(い)ってみると、働(はたら)き者(もの)の利助(りすけ)さんは、まだ牛小屋(うしごや)の中(なか)のくらやみで、ごそごそと何(なに)かしていました。

「えらい精(せい)が出(で)るのオ。」

と、海蔵(かいぞう)さんがいいました。

「なに、あれから二へん半田（はんだ）まで通（かよ）ってのオ、ちょっとおくれただてや。」
といいながら、牛（うし）の腹（はら）の下（した）をくぐって利助（りすけ）さんが出（で）て来（き）ました。
　二人（ふたり）が縁（えん）ばなに腰（こし）をかけると、海蔵（かいぞう）さんが、
「なに、きょうのしんたのむねのことだがのオ。」
と、話（はな）しはじめました。
「あの道（みち）ばたに井戸（いど）を一つ掘（ほ）ったら、みんながたすかると思（おも）うがのオ。」
と、海蔵（かいぞう）さんがもちかけました。
「そりゃ、たすかるのオ。」

と、利助さんがうけました。

「牛が椿の葉をくっちまうまで知らんどったのは、清水が道から遠すぎるからだのオ。」

「そりゃ、そうだのオ。」

「三十円ありゃ、あそこに井戸がひとつ掘れるだがのオ。」

「ほオ、三十円のオ。」

「ああ、三十円ありゃええだげな。」

「三十円ありゃのオ。」

こんなふうにいっていても、いっこう利助さんが、こちらの心をくみとってくれないので、海蔵さんは、

はっきりいってみました。

「それだけ、利助さ、ふんぱつしてくれないかエ。きけば、お前、だいぶ山林でもうかったそうだが。」

利助さんは、いままで調子よくしゃべっていましたが、きゅうに黙ってしまいました。そして、じぶんのほっぺたをつねっていました。

「どうだエ、利助さ。」

と、海蔵さんは、しばらくして答えをうながしました。

それでも利助さんは、岩のように黙っていました。

どうやら、こんな話は利助さんには面白くなさそうでした。

「三十円で、できるげながのオ。」

と、また海蔵さんがいいました。

「その三十円をどうしておれが出すのかエ。おれだけがその水をのむなら話がわかるが、ほかのもんもみんなのむ井戸に、どうしておれが金を出すのか、そこがおれにはよくのみこめんがのオ。」

と、やがて利助さんはいいました。

海蔵さんは、人々のためだということを、いろいろと説きましたが、どうしても利助さんには「のみこめ」ませんでした。しまいには利助さんは、もうこんな話はいやだというように、

「おかか、めしのしたくしろよ。おれ、腹がへっとるで。」
と、家の中へむかってどなりました。
海蔵さんは腰をあげました。利助さんが、夜おそくまでせっせと働くのは、じぶんだけのためだということがよくわかったのです。
ひとりで夜みちを歩きながら、海蔵さんは思いました。――こりゃ、ひとにたよっていちゃだめだ、じぶんの力でしなけりゃ、と。

旅の人や、町へゆく人は、しんたのむねの下の椿の木に、賽銭箱のようなものが吊るされてあるのを見ました。それには札がついていて、こう書いてありました。

「ここに井戸を掘って旅の人にのんでもらおうと思います。志のある方は一銭でも五厘でも喜捨して下さい。」

これは海蔵さんのしわざでありました。それがしょうこに、それから五、六日のち、海蔵さんは、椿の木に向かいあった崖の上にはらばいになって、えにしだ

の下から首ったまだけ出し、人々の喜捨のしようを見ていました。

やがて半田の町の方からお婆さんがひとり、乳母車を押してきました。花を売って帰るところでしょう。お婆さんは箱に目をとめて、しばらく札をながめていました。しかし、お婆さんは字を読んだのではなかったのです。なぜなら、こんなひとりごとをいいました。

「地蔵さんも何もないのに、なんでこんなところに賽銭箱があるのじゃろ。」そしてお婆さんは行ってしまいました。

海蔵さんは、右手にのせていたあごを、左手にのせ

かえました。

こんどは村の方から、しりはしょりした、がにまたのお爺さんがやって来ました。「庄平さんのじいさんだ。あの爺さんは昔の人間でも、字が読めるはずだ。」と、海蔵さんはつぶやきました。

お爺さんは箱に眼をとめました。そして「なになに。」といいながら、腰をのばして札を読みはじめました。読んでしまうと、「なアるほど、ふふウん、なアるほど。」と、ひどく感心しました。そして、懐の中をさぐりだしたので、これは喜捨してくれるなと思っていると、とり出したのは古くさい莨入れでした。お爺

さんは椿の根元でいっぷくすって行ってしまいました。

海蔵さんは起きあがって、椿の木の方へすべりおりました。

箱を手にとって、ふってみました。何の手ごたえもないのでした。

がっかりして海蔵さんは、ふうッと、といきをもらしました。

「けっきよく、ひとは頼りにならんとわかった。いよいよこうなったら、おれひとりの力でやりとげるのだ。」

といいながら、海蔵さんは、しんたのむねをのぼって行きました。

四

次の日、大野の町へ客を送ってきた海蔵さんが、村の茶店にはいっていきました。そこは、村の人力曳きたちが一仕事して来ると、次のお客を待ちながら、憩んでいる場所になっていたのでした。その日も、海蔵さんよりさきに三人の人力曳きが、茶店の中に憩んでいました。

店にはいって来た海蔵さんは、いつものように、駄菓子箱のならんだ台のうしろに仰向けに寝ころがってうっかり油菓子をひとつ摘んでしまいました。

人力曳きたちは、お客を待っているあいだ、することがないので、つい、駄菓子箱のふたをあけて、油菓子や、げんこつや、ぺこしゃんという飴や、やきするめや餡つぼなどをつまむのが癖になっていました。海蔵さんもまたそうでした。

しかし海蔵さんは、今、つまんだ油菓子をまたもとの箱に入れてしまいました。

見ていた仲間の源さんが、

「どうしただや、海蔵(かいぞう)さ。あの油菓子(あぶらがし)は鼠(ねずみ)の小便(しょうべん)でもかかっておるだかや。」

といいました。

海蔵(かいぞう)さんは顔(かお)をあかくしながら、

「ううん、そういうわけじゃねえけれど、きょうはあまり喰(た)べたくないだがや。」

と、答(こた)えました。

「へへエ。いっこう顔色(かおいろ)も悪(わる)くないようだが、それでどこか悪(わる)いだかや。」

と、源(げん)さんがいいました。

しばらくして源(げん)さんは、ガラス壺(つぼ)から金平糖(こんぺいとう)を一摑(ひとつか)

みとり出すと、そのうちの一つをぽオいと上に投げあげ、口でぱくりと受けとめました。そして、

「どうだや、海蔵さ。これをやらんかや。」

といいました。海蔵さんは、昨日まではよく源さんと、それをやったものでした。二人で競争をやって、受けそこなった数のすくないものが、相手に別の菓子を買わせたりしたものでした。そして海蔵さんは、この芸当ではほかのどの人力曳きにも負けませんでした。

しかし、きょうは海蔵さんはいいました。

「朝から奥歯がやめやがってな、甘いものはたべられんのだてや。」

「そうかや、そいじゃ、由さ、やろう。」
といって、源さんは由さんと、それをはじめました。
二人は色とりどりの金平糖を、天井に向かって投げあげてはそれを口でとめようとしましたが、うまく口にはいるときもあれば、鼻にあたったり、たばこぼんの灰の中にはいったりすることもありました。
海蔵さんは、じぶんがするなら、ひとつもそらしはしないのだがなあ、と思いながら見ていました。あまり源さんと由さんが落としてばかりいると、「よし、おれがひとつやって見せてやろかい。」といって出たくなるのでしたが、それをがまんしていました。これは

たいへんつらいことでありました。

はやく、お客がくればいいのになあ、と海蔵さんは眼をほそめて明るい道の方を見ていました。しかしお客よりさきに、茶店のおかみさんが、焼きたてのほかほかの大餡巻をつくってあらわれました。

人力曳きたちは、大よろこびで、一本ずつとりました。海蔵さんもがまんできなくなって、手が少しうごきだしましたが、やっとのことでおさえました。

「海蔵さ、どうしたじゃ。一銭もつかわんで、ごっそりためておいて、大きな倉でもたてるつもりかや。」

と、源さんがいいました。

海蔵さんは苦しそうに笑って、外へ出てゆきました。そして、溝のふちで、かやつり草を折って、蛙をつっていました。

海蔵さんの胸の中には、拳骨のように固い決心があったのです。今までお菓子につかったお金を、これからは使わずにためておいて、しんたのむねの下に、人々のための井戸を掘ろうというのでありました。

海蔵さんは、腹も歯もいたくありませんでした。のどから手が出るほど、お菓子はたべたかったのでした。

しかし、井戸をつくるために、今までの習慣をあらためたのでありました。

五

それから二年たちました。

牛が葉をたべてしまった椿にも、花が三つ四つ咲いたじぶんの或る日、海蔵さんは半田の町に住んでいる地主の家へやっていきました。

海蔵さんは、もう二タ月ほどまえから、たびたびこの家へ来たのでした。井戸を掘るお金はだいたいできたのですが、いざとなって地主が、そこに井戸を掘ることをしようちしてくれないので、何度も頼みに来た

のでした。その地主というのは、牛を椿につないだ利助さんを、さんざん叱ったあの老人だったのです。

海蔵さんが門をはいったとき、家の中から、ひえっというひどいしゃっくりの音がきこえて来ました。たずねて見ると、一昨日から地主の老人は、しゃっくりがとまらないので、すっかり体がよわって、床についているということでした。それで、海蔵さんはお見舞いに枕もとまできました。

老人は、ふとんを波うたせて、しゃっくりをしていました。そして、海蔵さんの顔を見ると、

「いや、何度お前が頼みにきても、わしは井戸を掘ら

せん。しゃっくりがもうあと一日つづくと、わしが死ぬそうだが、死んでもそいつは許さぬ。」
と、がんこにいいました。

海蔵さんは、こんな死にかかった人と争ってもしかたがないと思って、しゃっくりにきくおまじないは、茶わんに箸を一本のせておいて、ひといきに水をのんでしまうことだと教えてやりました。

門を出ようとすると、老人の息子さんが、海蔵さんのあとを追ってきて、
「うちの親父は、がんこでしようがないのですよ。そのうち、私の代になりますから、そしたら私があな

たの井戸を掘ることを承知してあげましょう。」といいました。

海蔵さんは喜びました。あの様子では、もうあの老人は、あと二、三日で死ぬに違いない。そうすれば、あの息子があとをついで、井戸を掘らせてくれる、これはうまいと思いました。

その夜、夕飯のとき、海蔵さんは年とったお母さんに、こう話しました。

「あのがんこ者の親父が死ねば、息子が井戸を掘らせてくれるそうだがのオ。だが、ありゃ、もう二、三日で死ぬからええて。」

すると、お母さんはいいました。

「お前は、じぶんの仕事のことばかり考えていて、悪い心になっただな。人の死ぬのを待ちのぞんでいるのは悪いことだぞや。」

海蔵さんは、とむねをつかれたような気がしました。

お母さんのいうとおりだったのです。

次の朝早く、海蔵さんは、また地主の家へ出かけていきました。門をはいると、昨日より力のない、ひきつるようなしやっくりの声が聞こえて来ました。だいぶ地主の体が弱ったことがわかりました。

「あんたは、また来ましたね。親父はまだ生きていま

すよ。」

と、出て来た息子さんがいいました。

「いえ、わしは、親父さんが生きておいでのうちに、ぜひおあいしたいので。」

と、海蔵さんはいいました。

　老人はやつれて寝ていました。海蔵さんは枕もとに両手をついて、

「わしは、あやまりに参りました。昨日、わしはここから帰るとき、息子さんから、あなたが死ねば息子さんが井戸を許してくれるときいて、悪い心になりました。もうじき、あなたが死ぬからいいなどと、恐ろ

しいことを平気で思っていました。つまり、わしはじぶんの井戸のことばかり考えて、あなたの死ぬことを待ちねがうというような、鬼にもひとしい心になりました。そこで、わしは、あやまりに参りました。井戸のことは、もうお願いしません。またどこか、ほかの場所をさがすとします。ですから、あなたはどうぞ、死なないで下さい。」

と、いいました。

老人は黙ってきいていました。それから長いあいだ黙って海蔵さんの顔を見上げていました。

「お前さんは、感心なおひとじゃ。」

と、老人はやっと口を切っていいました。

「お前さんは、心のええおひとじゃ、わしは長い生涯じぶんの慾ばかりで、ひとのことなどちっとも思わずに生きて来たが、いまはじめてお前さんのりっぱな心にうごかされた。お前さんのような人は、いまどき珍しい。それじゃ、あそこへ井戸を掘らしてあげよう。どんな井戸でも掘りなさい。もし掘って水が出なかったら、どこにでもお前さんの好きなところに掘らしてあげよう。あのへんは、みな、わしの土地だから。うん、そうして、井戸を掘る費用がたりなかったら、いくらでもわしが出してあげよう。わしは明日

にも死ぬかも知れんから、このことを遺言しておいてあげよう。」
海蔵さんは、思いがけない言葉をきいて、返事のしようもありませんでした。だが、死ぬまえに、この一人の慾ばりの老人が、よい心になったのは、海蔵さんにもうれしいことでありました。

六

いいいかいかい、しんたのむねから打ちあげられて、少しくもった空で花火がはじけたのは、春も末に近いころの昼でした。

　村の方から行列が、しんたのむねを下りて来ました。行列の先頭には黒い服、黒と黄の帽子をかむった兵士が一人いました。それが海蔵さんでありました。しんたのむねを下りたところに、かたがわには椿の木がありました。今花は散って、浅緑の柔らかい若葉になっていました。もういっぽうには、崖をすこしえぐりとって、そこに新しい井戸ができていました。

　そこまで来ると、行列がとまってしまいました。先頭の海蔵さんがとまったからです。学校かえりの小さい子供が二人、井戸から水を汲んで、のどをならしながら、美しい水をのんでいました。海蔵さんは、そ

れをにこにこしながら見ていました。

「おれも、いっぱいのんで行こうか。」

子供たちがすむと、海蔵さんはそういって、井戸のところへ行きました。

中をのぞくと、新しい井戸に、新しい清水がゆたかに湧いていました。ちょうど、そのように、海蔵さんの心の中にも、よろこびが湧いていました。

海蔵さんは、汲んでうまそうにのみました。

「わしはもう、思いのこすことはないがや。こんな小さな仕事だが、人のためになることを残すことができたからのオ。」

と、海蔵さんは誰でも、とっつかまえていいたい気持ちでした。しかし、そんなことはいわないで、ただにこにこしながら、町の方へ坂をのぼって行きました。

日本とロシヤが、海の向こうでたたかいをはじめていました。海蔵さんは海をわたって、そのたたかいの中にはいって行くのでありました。

七

ついに海蔵さんは、帰って来ませんでした。勇ましく日露戦争の花と散ったのです。しかし、海蔵さんの

しのこした仕事は、いまでも生きています。椿の木かげに清水はいまもこんこんと湧き、道につかれた人々は、のどをうるおして元気をとりもどし、また道をすすんで行くのであります。

底本：「少年少女日本文学館第十五巻　ごんぎつね・夕鶴」講談社
　　１９８６（昭和61）年４月18日第１刷発行
　　１９９３（平成５）年２月25日第13刷発行
入力：田浦亜矢子
校正：もりみつじゅんじ
１９９９年10月25日公開
２００９年１月18日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。